

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史Ⅰ
第二号 二〇〇八年三月 六三―九九頁
南山大学史料室

人類学研究所の歴史と評価

渡
邊
学

The History and Evaluation of Nanzan Anthropological Institute
WATANABE Manabu

archeia: documents, information and history
No.2 March, 2008 pp.63-99
Nanzan University Archives

人類学研究所の歴史と評価

渡邊 学

はじめに

南山大学人類学研究所は、南山大学創立の半年後、一九四九年九月一日に人類学民族学研究所として設立され、大学の歴史とともにあった。その歴史をひもといてみると、けっして平坦な道のみではなかったことがわかる。また、神言修道会のヨーロッパでの研究活動や中国での教育活動と不可分であることが明らかになる。

私は本論において史料室の手書き資料をはじめとしてさまざまな資料を駆使してその歴史に光を当てるとともにその評価を試みてみたい。¹⁾

一 人類学研究所設立の歴史的文脈

現在の人類学研究所は、一九七九年四月一日の改組のもとに成り立っている。しかしながら、同研究所にはそれ以前に三十年弱の歴史があるのであり、その成立から振り返ってみる必要がある。²⁾（以下において敬称は略させて

いただく。

神言修道会は、ヴィルヘルム・シュミット Wilhelm Schmidt (一八六八—一九五四)をはじめとして、多数の優秀な人類学者を輩出した修道会として知られている。シュミットは、ドイツ生まれの人類学者、民族学者、言語学者であり、大著『神観念の起源』(一九二二—一九五五)によって知られている。彼は、単系的な進化論を批判し文化圏説を發展させて、いわゆるウィーン学派の基礎を築いた。また、未開社会における「高神 High god」の観念を指摘したことで有名である。シュミットは一八九〇年に神言修道会に入会し、一八九二年にカトリック司祭として叙階された。そして、一九〇六年に『アントローポス』(Anthroposとはギリシア語で人間を意味する)誌を創刊し、一九三一年にはアントローポス研究所を設立した。同研究所の最初の規則は、「諸民族と文化の歴史の中における神の神秘的な働きと人間精神のためまぬ探求の発見や記述をわかちあう」³⁾ことを促しており、そこには信仰上の動機付けが伺える。

シュミットは一九三五年に来日し、その後、アントローポス研究所日本支部を設立するように神言修道会の総会に提案した。しかしながら、この提案は神言会の活動目的の再検討によって棚上げされてしまったのである。

(一) 南山大学の創立と「人類学民族学研究所」の設立

一九四八年に文部省に提出された南山大学設置申請書には「人類学民族学研究所」の設置が盛り込まれていた。そして、一九四九年四月一日に南山大学が創立され、半年後の九月一日に人類学民族学研究所が学長直属機関として設立された。

中山英司によれば、「人類学民族学研究所」は、民族学部、言語学部、人類学部等に分かれ、博物館及び図書館

が付設されることになっていた。

以下がその概要である。

初代所長 沼澤喜市

副所長 中山英司

正所員

民族学

沼澤喜市、マテオ・エーダー、オーベルレ、ファイフェル、浅井恵倫

言語学

フランシス・ギート、アントン・レンメルヒルト

人類学

中山英司、清野謙次

比較宗教学 ゲマインダ、田北耕也

客員

ブーシユ（支那学）、シュライバー（支那学）、ラーマン（民族学）、グロート（考古学）、

エーダー（民俗学）、ナーベルフェルト（考古学）

賛助員 岡正雄、石田英一郎、水野清一

顧問

ヴィルヘルム・シュミット、デル・レ、長谷部言人、原田淑人、駒井卓、洪沢敬三、梅原末治

また、その他、専属所員の人选は決定してないと書かれている。これは、現在の第一種研究所員に相当するのであろう。そして、外国語雑誌と日本語雑誌の発刊が予定されていると記されている。

さらに、それから四年後の史料室蔵の手書き資料（一九五三年頃）によれば、「人類学民族学研究所」は、民族

学部、言語学部、人類学・考古学部（この場合の部は部門の意味である）という三つから四つの柱を擁す壮大な研究施設であった。創立当初からみると、比較宗教学の柱がなくなり、新たに考古学が人類学に加わっているのが指摘できる。

おそらく、ドイツのアントローポス研究所に対する強い思いがあったにちがいないが、このような大規模な施設を地方の一私立大学が維持管理することは至難の業であったと考えられる。

初代所長：沼澤喜市（民族学者）

副所長：中山英司（形質人類学者）

民族学部 沼澤喜市、マテオ・エーダー

言語学部 浅井恵倫、フランシス・ギート、アントン・レンメルヒルト

人類学・考古学部 中山英司、清野謙次

助手、写真技手、図工、タイピスト、調査補助員、庶務会計事務員

賛助員：岡正雄、石田英一郎、水野清一、駒井和愛、金関丈夫

顧問：ヴィルヘルム・シュミット、デル・レ、長谷部言人、原田淑人、洪沢敬三、梅原末治、松本信廣、

金田一京助、柳田國男

図書数：三五〇〇冊、その他、北京輔仁大学所蔵人類学関係図書約八〇〇〇冊を保管利用

（一九五二年八月一日現在）

一見すればわかるように、顧問としてシュミット、金田一京助、柳田國男を迎えるなど、その陣容の壮大さは際立っている。

また、この表を見ると、最後に「北京輔仁大学所蔵人類学関係図書約八〇〇冊を保管利用」と書かれているのがわかる。輔仁大学は当初、アメリカのカトリック系のベネディクト会の支援を受けて一九二七年に北京に設立された。その後、経済的な理由で一九三三年からアメリカとドイツの神言会によって運営されるようになった。しかしながら、一九五〇年になって中華人民共和国政府によって接収され国立大学となり、また、北京師範大学との合併によって二七年に及ぶ歴史に終止符が打たれた。南山大学人類学民族学研究所に輔仁大学所蔵人類学関係図書が八〇〇冊も保管されていたのは、このような歴史的な背景を前提としている。^⑦（ちなみに、輔仁大学そのものは、台湾で再建され、一九六〇年に中国司教団、神言修道会、イエズス会が共同で運営して現在に至っている。^⑧）

本研究所は、アントローポス研究所が「民族学を中心とし、言語学と先史学を補助科学とした文化史的方向」（沼澤喜市）の文化人類学（民族学 *ethnology*）を志向していたのに対して、「形質人類学 *physical anthropology*」を重要研究科目としていた。これは、自然人類学と呼ばれるものであり、人類やチンパンジーやゴリラなどヒト科の共通祖先から現生人類がどのように進化してきたのかを解明する学問である。（最初の学生は、四〇〇名の人々の頭骨の長さと幅を調査するという課題が夏休みに出されたという）。形質人類学に力点が置かれたのは、医学博士であった副所長中山英司の影響が強かったことを物語っていると言えよう。^⑨

形質人類学の強調は、シュミットの構想からは大きく外れたものであり、所長沼澤は『人類学研究所紀要』1号において以下のように述べている。「実際に南山大学に設立された人類学研究所の組織とスタッフについて報告をうけたシュミットは、私への書簡の中で大いに不満を述べていた。シュミットの当時の希望は *Anthropos Institut* の

支部を日本に設立することであり、そのための所員もすでに予定されていた¹⁰⁾。

実際、第二代所長となったアントン・レンメルヒルト、考古学者のヨハネス・マリンガー、人類学者のマルティン（マルチヌス）・グジンデとパプアニューギニア調査を数回行ったハインリッヒ・アウフェンガーなど、シユミット門下の研究者が本研究所に派遣されたのであった¹¹⁾。

そして、北京の輔仁大学から人類学関係図書を寄贈されたばかりではなく、同大学で教鞭を執っていた教員もまた南山大学の助力となった。小林知生（考古学者）が一九五五年に南山大学文学部教授になり、改組の時期に所長事務取扱を務めた。また、マテオ（マチアス）・エーダーは、同大学民族学博物館長を一九四一年から一九四九年まで務めていたが、一九五二年に設置された社会科学部人類学科教授として赴任したのであった。エーダーは、一九四二年から一九八〇年に亡くなるまで通算三八年間にわたって *Folklore Studies* (Vo. 1-2) (1942 - 1962) を *Asian Folklore Studies* (Vol. 22-39 (1962-1980)) の編集に当たった。

このように、南山大学人類学民族学研究所にはシユミットの門下生と北京輔仁大学の人材が結集していた。

(二) 人類学民族学研究所の最盛期

一九五二年に社会科学部人類学科が設立された。その申請書を参照すれば、その教員組織は、沼澤喜市、フランツ・ギート、ジョン・マリンガー、アントン・レンメルヒルト、マチアス・エーダー、中山英司の名が上がっており、研究所と人類学科の一体性が感じられる¹²⁾。

実際、南山大学人類学研究所が全国的な名声を獲得したのは、このような第一期の華々しい活動によってであった。

人類学民族学研究所は、一九五四年にアントン・レンメルヒルトを第二代所長に迎え、人類学民族学研究所と人類学研究所の両方の名称が並立する混乱した状態を解消するために名称を人類学研究所に一本化した。

一九五五年に南山大学において第十回日本人類学会・日本民族学協会連合大会が開催され、レンメルヒルト第二代所長が委員長、中山副所長が総務を担当した。大会では、前年スイスで他界したW・シュミットの記念研究会が催され、沼澤と中山をはじめとして、南山大学の人類学者数名が研究発表を行った。

また、出版活動にも力を入れ、一九六〇年にはアントローポス研究所の創立者の一人、マルティン・グシンデ著『アフリカの矮小民族——ピグミーの生活と文化』（南山大学選書1、築島謙三訳、平凡社、一九六〇年）、一九六二年にはヴィルヘルム・シュミット著『母権』（南山大学選書2、山田隆治訳、中日新聞社、一九六二年）、また、同年、Martin Gusinde and Chiye Sano, eds., *An annotated bibliography of Ainu studies by Japanese scholars*, *Collectanea universitatis catholicae Nanzan Series 3*, Tokyo: Heibonsha, Nagoya: Nanzan University, 1962を刊行した。

一九六四年に南山大学が山里町の新校舎に移転したのに伴い、同研究所も人類学科とともに第一研究棟六階に移転し、陳列室は新図書館地下一階に収まった。そして、一九六七年には陳列室が文部省から博物館相当施設に指定された。

同年（一九六七）十一月十一、十二日には、ふたたび南山大学においてレンメルヒルトが大会会長となって第二十二回日本人類学会・日本民族学会連合大会が開催されている¹⁴。

一九六九年には愛知県美術館で「世界民族美術展」が外務省他の後援、中日新聞他主催で開催され、南山大学とアントローポス研究所が協賛した。

一九七〇年には沼澤学長が研究所長事務取扱を兼務し、翌一九七一年には、南山大学人類学研究所編『W・シュ

ミット生誕一〇〇年記念論文集』（南山大学選書4、中日新聞社、一九七一年）を刊行している。

そして、一九七二年には沼澤教授が学長退任後、翌年三月末まで所長事務取扱に就任し、『人類学研究所紀要』一号（一九七二年）を発刊している。

ちなみに、同年、ヨハネス・ヒルシュマイヤー（経営学者）が第三代学長に就任している。

二 人類学研究所の改組とその成果

（一） 人類学研究所改組の経緯とその理念

当然ながら、このような神言会士の豊かな人材を資源とした人類学研究所は、決して長続きしなかった。その理由は、沼澤喜市学長の後、神言会士の人類学者が続々とは続かなかったからである。沼澤の後にもアントン・レンメルヒルトがいたが、彼一人で運営できるようなものではなかった。

そのため、当然ながら、神言会士主体の研究所の世俗化、いうならば、学科の一般教員主導による経営が必要となった。そのことをつぶさに見て取ったのが、第三代学長ヒルシュマイヤーであった。彼は、人類学研究所改組研究委員会を設立し、一九七四年から五年の歳月をかけて改組を行い、一九七四年に新たに学園附設研究所として設立された南山宗教文化研究所とともに、大学附設研究所として立て直しを図ったのであった¹⁵。そして、一九七八年には宗教文化研究所・人類学研究所改組準備委員会が設置されている。

実際、この時期の『人類学研究所紀要』（四号〜八号、一九七五〜七八年）を見ると、「彙報 研究者の動向」の記事があり、学科教員の近況報告が掲載されていて、さながら人類学科紀要の観がある。そのことを端的に表して

いるのが、「〇〇教授 人類学科着任」の記事が見られることである。

人類学科には、伝統的に民族学（文化人類学）、自然（形質）人類学、考古学の三部門があったが、自然人類学者は中山英司以降補充されず、文化人類学と考古学が主要部門となっていた。それに対して、改組によって人類学科は、文化人類学系教員と考古学系教員の間に亀裂がもたらされることになる。つまり、前者が人類学研究所に協力するとともに、後者が人類学博物館（一九七九年に人類学資料陳列室から改称）に協力するという分断構造がここに生じたからである。一方で、『人類学研究所紀要』には、文化人類学、形質人類学、考古学の業績がそろっていたが、他方で、改組後の『人類学研究所叢書』や『人類学研究所通信』はもっぱら文化人類学だけを扱っているのがわかる。

一九七九年に改組された後の人類学研究所がめざしたものは、当初の人類学民族学研究所の構想に比べてきわめてささやかであった。また、むしろアントロポス研究所設立の趣旨にかなうものであった。その規程（一九七八年）によれば、研究所の目的は「1 主としてアジア諸地域の基層的、伝統的な民族文化を研究対象とし、宗教学族学その他の諸問題ないしは、一定地域社会に関する比較的短期間の歴史人類学的な特定研究の実施。2 特定研究の積み重ねによる、これら諸地域における民族文化の特性およびその形成、相互交渉の様相ならびにその展開過程等の解明」となっている。これは、まさしく現行の規程そのものである。

簡単に言えば、改組後の人類学研究所は、宗教民族学（宗教の文化人類学）と地域研究を目的とし、歴史人類学的な特定研究をめざしていると言えよう。

また、その改組の制度上の趣旨は、神言会士の手当ができなくなった代わりに、研究所専任として第一種研究員を一名配置するということではなかったかと思われる。そして、大学当局は、事実上、人類学科の文化人類学関係

表1 各研究活動時期と研究会・研究発表などの数の変遷

		担当者数	オブザーバー	研究会数	発表数	討論数	特別講演	公開講演会	懇話会	映画上映
第1期	1979-1982	6		25	19	7				
第2期	1982-1985	8	2	24	18	6		14		
第3期	1985-1988	10		24	21	3		14		
第4期	1988-1991	11	1	26	25	1		11		
〈休止〉	1991-1992							1		
第5期	1992-1995	12		7	13	2		3		
〈休止〉	1995-1997							0		
第6期	1997-2000	13		7	14	2	5	10	1	
〈休止〉	2000-2001							4	3	
第7期	2001-2004	9		8	9			10	4	
〈休止〉	2004-2006			2	5			6	3	
第8期	2006-2008	9		3	5			9	3	2

の教員にその経営を委ねて、人類学研究所の維持管理を行わせようとしたと考えられる。

(二) 改組後の活動

1 三年サイクルの研究プロジェクトの実施

改組後の人類学研究所の活動は、比較的緩やかなものであった。主要な研究活動としては、公開講演会や研究会を別とすれば、三年を一つのサイクルとして研究プロジェクトを立ち上げ、連続して非公開の研究会を開催し、叢書として自費で『研究活動報告書』を印刷するというものであった。したがって、改組当初から、出版物は三年に一度、自費出版の叢書が出るだけであると考えられていた。

この時期に主に責任をとったのは、山田隆治（インドの文化人類学）と倉田勇（インドネシアの文化人類学）の両教授であった。二人は改組から一九九五年三月末まで交代で所長事務取扱を努めている。¹⁷⁾

そして、改組初期には白鳥芳郎（上智大学文学部教授）を客員研究所員として迎え、白鳥所員を研究代表者として第一期研究活動「土着宗教と伝統宗教」（一九七九—一九八二）を行った。¹⁸⁾

表1にみられるように、第一期には二五回研究会を開催し、研究発表が一

九件、討論が七回行われている。そして、その成果を数百ページの研究報告書として出版していたのであるが、出版費用としては毎年百万円ほど積み立て、三百万円あまりを自費出版に当てていたのであった。¹⁹⁾

このようなスタイルで第三期が終わるまで研究活動が続けられたが、杉本良男第一種研究所員がインドで在外研究をした一九九一年から一九九二年にかけて、第四期と第五期の間、一年間中断している。²⁰⁾

第一期研究活動「土着宗教と伝統宗教」(一九七九—一九八二)

第二期研究活動「伝統宗教と土着化の諸相」(一九八二—一九八五)

第三期研究活動「伝統宗教と社会・政治的統合」(一九八五—一九八八)

第四期研究活動「伝統宗教と伝統的知識体系」(一九八八—一九九一)

第五期研究活動「宗教・民族・伝統のイデオロギー論的考察」(一九九二—一九九五)

第六期研究活動「アジア移民のエスニシティと宗教」(一九九七—二〇〇〇)

第七期研究活動「アジア市場の文化と社会——流通・交換をめぐる学際的まなざし」(二〇〇一—二〇〇四)

第八期研究活動「コロナリアル、ポスト・コロナリアル期における社会変動と宗教の「再選択」」

(二〇〇六—二〇〇八)

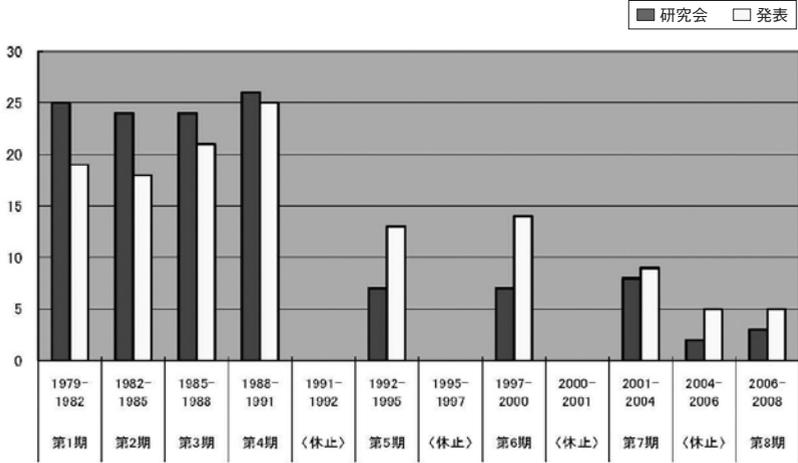


図1 研究活動各期の研究会回数と発表件数の推移

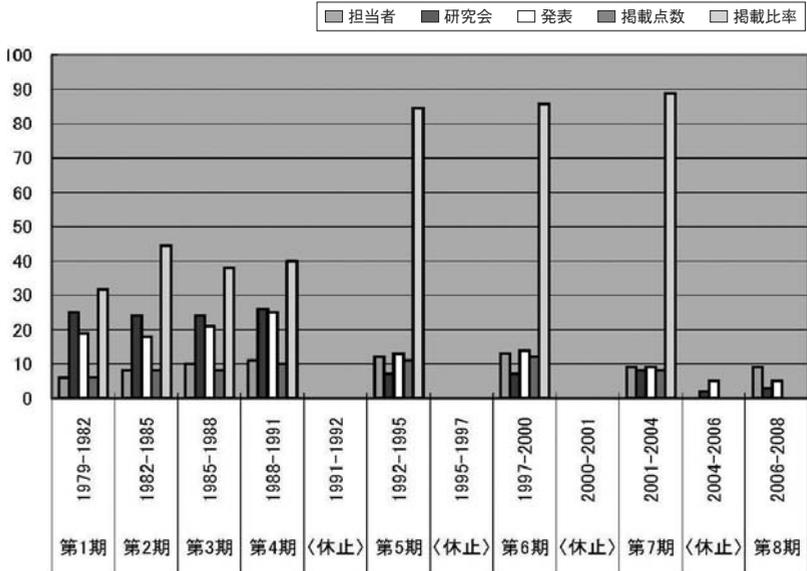


図2 研究発表の件数と報告書掲載点数の比率の変遷

2 研究活動の形骸化

これらの研究活動と関わる研究会の形骸化は、「図1 研究活動各期の研究会回数と発表件数の推移」に明示されているように、一九九二年にすでにはじまっている。

初期の研究活動（第一～四期）においては三年間に二四～二六回の研究会が開催され、一八～二五件の発表がなされていた。しかしながら、杉本所員帰国後の第五期（一九九三～一九九五）から三年間に七回にまで激減（四分の一近くに減少）し、発表件数も八～一八件にまで減少している。第五期には一泊二日の研究会を年に二～三回程度開催して三年間継続するというスタイルに変更されたのであった。それがさらに半日程度の研究会に変更されている。²¹⁾

一九九一～一九九二年に一年間休止した後、一九九五～一九九七年（二年間）、二〇〇〇～二〇〇一年（一年間）、二〇〇四～二〇〇六年（二年間）の五年間、総計六年間の休止時期があった。²²⁾ これらは、改組世代の退任の時期（一九九五年三月）とそれ以降の時期と対応している。

3 外部資金の導入と予算未消化の矛盾

継続中の第八期を除いて最低なのは第七期であり、研究会回数が八回、発表件数が九件であった。報告書掲載論文が九点あり、そのうち序論が一点なので、必要最低限の発表がほとんどすべて掲載されたことになる。さらに、理解に苦しむのは、これが研究所予算を使った主要事業でありながら、東海学術振興財団（二〇〇一年度）と南山大学経営研究センター（二〇〇二～二〇〇三年度）から研究助成を受けていることである。外部資金を導入することは確かに好ましいことではあるが、外部資金と学内の競争的研究費を取得して、研究所の主要事業を最低限の回数

でこなしているのは、それなりの説明が必要なのではなかるうか。また、それでいて二〇〇四年度には予算執行率が六〇%を切るというちぐはぐな状況がみられる²³⁾。

実際、研究プロジェクト休止期間の二〇〇四年度には、予算執行率が六〇%未満となり、その理由書を提出するに至っている。その理由書には、『人類学通信』が発行されなかったり、原稿の遅れによる第七期特定研究出版費（臨時費）が執行されなかったり、AESのページ数が予想より少なかったりといった理由が並べられている²⁴⁾。

また、最低限の発表をすべて報告書に掲載するという方向性については、図2のようにまとめることができる。研究発表のほとんどすべてが掲載されているということは、それ以外の研究活動が行われなかったことを示しているので、決して好ましいことではない。

第一期には、研究会が二五回開催され、研究発表が一九件もあったため、掲載比率が三二%しかなかったものが、第五期に研究会が三年間に七回程度になって以降、掲載比率が急上昇して第五期八五%、第六期六七%、第七期ほぼ一〇〇%となっている。これは事実上、発表者の原稿の大多数が掲載されている状況であり、一般的にはおそらく二泊三日のシンポジウムを一回開催すれば、すべてこなせる程度の仕事量であると考えられる。それを三年間にわたって行う必然性があるとはいえない²⁵⁾。

このようにして、人類学研究所の低迷は、一九九五年を一つの軸にして展開していることが明らかになる。

4 改組世代の定年と第一種の転任

第五期研究活動が終わった一九九五年の段階で杉本所員が退職し、また、改組世代の山田、倉田両教授が定年を迎えて役職から解放されて、人類学研究所の担い手がいなくなってしまう。

そこで、当時の研究所総合委員会委員長のジームズ・ハイジック南山宗教文化研究所長は、人類学研究所長を兼務することになった。彼が人類研に残したのは、①AFSを研究所の事業として正式に認めさせること、②クネヒト・ペトロ助教を第二種研究所員とし、さらに、教授に昇格をして、第一種研究所員とすることによって、所長に就任させたことであった。

しかしながら、それは、決して完全な解決と言えるものではなかった。

5 危機の慢性化——第一種研究所員／所長候補の採用人事の問題化——

その後、人類学研究所は第一種研究所員の採用人事をめぐって慢性的な危機に陥った。

まず、杉本の後任人事で一九九六年に採用された吉原和男がわずか二年で慶応大学に転出した。次に、その後任として宮沢千尋が一年間の研究生の期間を経て、一九九九年に採用された。しかしながら、早くも人類研の「一九九九年度自己点検評価報告書」には「研究所員の未経験、或は職責上の業務のために、研究活動が停滞し、研究所主催の公開講演シリーズは已む無く中止となった」と書かれていることが指摘できる。

さらに、森部一第二種研究所員が人類学研究所長になった二〇〇三年から次期所長の人選のためにワーキング・グループが作られ、数名の所長候補が呼ばれて懇話会が開催されたが、いずれも不調に終わった。一つには、所長として適齢とされたのが、どこの大学においても役職者を排出する五十歳代であったことが挙げられよう。その意

味で、所長人事は難航を極めた。

二〇〇五年からは坂井信三第二種研究所員が所長となり、一年間は所長人事に専念したが、その後、人類学研究所の第一種研究所員の枠が一つであることが判明し、宮沢第一種研究所員が第一種研究所員の枠を残したまま、学部学科などの大学内の他の部署に移籍できなければ、所長人事ができないことが明らかになった。

そして、二〇〇五年一月に宮沢第一種研究所員と坂井第二種研究所員とを入れ替える人事案が浮上したが、結局、宮沢所員が研究所に残ることを希望したため、その人事提案が取り下げられ、また、人類学博物館と人類学研究所の連携と宮沢所員の人事を絡める案も博物館側との根回しが十分になされていなかったために立ち消えになり、ついに坂井所長の任期が切れ、二〇〇七年四月一日に人類学研究所長が不在のまま、新年度を迎えることになった。

6 大学改組の暗い影——人類学科の拡大・拡散——

ちなみに、二〇〇〇年に行われた南山大学の全学的な改組も、人類学研究所の将来に暗い影を投げかけた。これによって人類学研究所の支持母体であった文学部人類学科が拡大・拡散の方向になり、文学部人類文化学科となった。この学科は、哲学、言語学、など多様な文系教員から構成されている。このこともまた、学科として一体となって人類学研究所を支えていくというコンセンサスを喪失させることにもなった。このことは明らかに、人類学研究所が弱体化した一つの遠因となっているとも言えよう。

さらに、もう一点指摘すれば、一九七九年の改組後の研究所の目的に「主としてアジア諸地域の基層的、伝統的な民族文化を研究対象」にするとということと、人類学を担当したり専攻したりする教員の構成が一致していないこ

とも挙げられる。現在の主要スタッフには、アフリカや南アメリカをフィールドとする研究者もいるのであり、改組後の目的を拡大解釈するか、規程を変更するなどの方策を講じなければ、将来、波乱要因となる可能性があるう。

7 人類学研究所の存廢の危機

いうまでもなく、二〇〇七年度に入って人類学研究所は絶体絶命の危機を迎えた。そもそも所長を人類学研究所はもとより、人類文化学科のみならず学内の人類学者の中から選出できなかったのである。

このような状況下において、人類学研究所所員会議では、予算執行等のために森部元所長を所長代理として認めるように四月一九日（木）の研究所総合委員会に要望を出した。同委員会では、執行部が第一種研究所員を所長に据えることを要求していることを鑑みて、評議員経験者を候補とする、もしくは、他研究所の第一種研究所員を所長候補にするという二つの代替案を併記することにして、四月二三日（月）の将来構想委員会に諮った。

その結果、将来構想委員会では、渡邊学南山宗教文化研究所第一種研究所員（宗教学、宗教心理学、宗教社会学専攻）を所長とするのがふさわしいという結論に達し、五月八日（火）の評議会で承認されたのであった。

むしろ、この人事は最終的なものではありえないので、渡邊が所長のときに人類学研究所の将来を何らかの形で決定しなければならぬだろう。

三 人類学研究所のこれまでの業績とその評価の試み

人類学研究所の活動を歴史的に評価するとき、まず創立から改組までの第一期（一九四九～一九七八）の活動が華々しかったと言える。とりわけ、一九六〇～一九七一年の間に『南山大学選書』四巻を刊行し、一九七二～一九七八年の間に『人類学研究所紀要』一～八号を刊行していることが指摘できる。また、一九五五年には第一〇回日本人類学会日本民族学協会連合大会、一九六七年には第二二回同大会を開催し、一九六九年には南山大学が愛知県美術館で「世界民族美術展」にアントローポス研究所とともに協賛している。

しかしながら、その後、一九七九年の改組の後、人類学研究所は長い低迷期を迎える。ここで、現況を少し振り返っておきたい。

すでに引用したように、人類学研究所規程第3条によれば、研究所の事業は以下の通りであった。

- 1 研究所を母体として組織された研究会の開催
- 2 公開講座、公開講演会等の開催
- 3 研究所と目的を同じくする内外研究機関および研究者との交流
- 4 学術調査の実施
- 5 研究成果その他の公刊
- 6 年報等の発行
- 7 文献・資料の収集

8 その他研究所の目的達成に必要な事業

長期研究計画に基づく研究会は1に相当する。すでに見たとおり、これに関しては先細りの状態が続いている。次に、2に関してみても、かつて年五回程度であった公開講演会が二、三回程度にまで減少している。3に関しても、長期研究計画に参加する学外研究者の割合が減少している状況を見ると、決して楽観できない状況であると言えよう。

4の「学術調査の実施」に関して言えば、予算化されていない以上、研究所を主体としては実際には行われていないのが実状である。

5の「研究成果その他の公刊」に関して言えば、AESを除外するとして改組後約三〇年間に叢書が七冊だけである。

6の「年報等の発行」に関しては、改組後はニューズレター相当の『人類学研究所通信』が一九九二年以降に年に一度程度、全部で一五号発行されているだけであり、年報は現在に至るまで発刊されていない。これは、今後の大きな課題であろう。

7の「文献・資料の収集」に関しては、内外の学術雑誌等は継続して収集しているが、図書に関しては必要図書がほとんどそろえられていないし、その領域に関してかなりの片寄が見られる。これに関しては、研究所図書が閉架式であり、館外貸出が禁止されているため、研究所の事務室が開いているときにしか利用できないという状況が少なからず影響していると思われる。

その他、人類学研究所はその主要な事業として三年単位の研究プロジェクトを行うが、研究会自体は特定のメン

バー以外には開かれたものとなっておらず、最初の五期分の報告書は自費出版で市販されていなかった。そのため、人類学研究所の活動は、限られた人々にしか知られることがなくなってしまうのである。実際、国立情報学研究所のデータベース（Webcat）によれば、自費出版された人類学研究所叢書をそれぞれ収蔵している図書館は四〇に満たない。叢書が市販されるようになって、収蔵図書館が一〇〜一四一に増加したのとは大きな対照をみせている。²⁶

これらの研究プロジェクトは、学外の研究者を招き、また、本学の人類学専攻の大学院生の研究と発表の機会を提供してきた。その意義は決して軽視できない。しかしながら、これらのプロジェクトの研究会は、基本的にメンバーと大学院生にのみ開かれたものであり、必ずしも多くの聴衆に開かれたものではなかった。したがって、これらのプロジェクトの研究会や研究報告によって裨益した人々は、かなり限定されたものであったといわなければならない。

また、研究報告書にしても、多額の経費を費やした自費出版であり、それらの大多数は献本されたのであり、その読者数たるや、微々たるものであったことが指摘できる。

このように考えると、これらの研究プロジェクトの受益者は、プロジェクト参加者と一部献本を受けた人々に限定されるのであり、はたして一冊当たり数百万円も大学の資金を投入するのに値するものであったかどうか疑問視されても致し方ないであろう。

研究プロジェクトの研究会を開催するにしても、たとえば毎回書記を置き、録音するなどの努力をして、いつでもだれが参加して、どのような研究会であったかという基本的な資料を蓄積していく努力が必要であったのではなからうか。

かろうじて、『人類学研究所通信』2号には、杉本所員の尽力によってそれぞれの研究発表や公開講演会の内容に関して数百字の要旨が載せてある。しかしながら、他のものには見当たらない。

それに対して、たとえば、その内容をテープ起こししてまとめるような努力を積み重ねれば、研究会の成果を残して広く公開していくことも考えられるであろう。少ない参加者の研究会であればあるほど、このような基本的な努力が必要であると考える。

第六期（一九九七～二〇〇〇）と第七期（二〇〇一～二〇〇四）に関しては、市販本の形をとったために研究所の活動が広く知られるようになったが、逆に、研究活動報告の点で情報が決定的に欠けているため、研究報告書の体裁をなしていないという欠点を抱えている。

さらに、第七期は、アジアの市場に焦点を当てたものであり、改組時の研究目的「主としてアジア諸地域の基層的、伝統的な民族文化を研究対象とし、宗教民族学その他の諸問題ないしは、一定地域社会に関する比較的短期間の歴史人類学的な特定研究の実施」という観点からは、少なからず外れているように思われる。

また、すでにくわしくみたように、長期研究計画に基づく研究会はますます形骸化していつており、研究活動があつて出版を行うというよりも、出版のためにあらかじめ研究会で発表しておくといった形に落ち着いてしまったように思われる。

また、設立後二三年を経て一九七二年に『人類学研究所紀要』1号が発刊されたが、改組直前の一九七八年に8号をもって休刊となっている。さらに、改組後二三年を経て、一九九二年によく『人類学研究所通信』がニューズレターとして発行されるようになったが、そのうち三号分が合併号であり、現在までに一五号しか発行されていない。

また、公開講演会も開催されているが、その成果は、『通信』においても報告されておらず、一般には講演会があったことしか周知されていない状況が続いている。

他方で、『Asian Folklore Studies』は一貫して刊行されてきている。しかしながら、AFSは長年、エーダー、クネヒト両師の個人的な事業として行われてきたものであった。その意味で、人類学研究所の事業として評価するにはむずかしいものがある。

改組以前の人類学研究所は学長直轄であり、神言修道会の方針と深く結びついたものであった。しかしながら、それがうまく機能しなくなり、まず人類学研究所改組研究委員会、次に宗教文化研究所・人類学研究所改組準備委員会が設置され、結果的に、人類学研究所は、人類学科の手に委ねられて存続することになったのであった。

しかしながら、そのような経緯が忘却されるにつれて、人類学研究所とその基盤となる人類学科（二〇〇〇年改組後は人類文化学科）に対する風当たりは厳しいものとなっていった。それは、成果主義やコスト・パフォーマンスが全学的に求められるようになっていったからであると考えられる。南山宗教文化研究所が多くの成果を収めるとともに多くの出版物を出し世界的に評価される研究所となっていたのに対して、人類学研究所は、あくまで学科ベースの国内向けの研究施設に留まったことが指摘できよう。

人類学研究所が近年、その多くが次期所長候補の選任をめざしていたとはいえ、公開講演会や懇話会を開いていることは評価に値する。より多くの人々に開かれた催しが求められているからである。

しかしながら、それらの成果が出版物やさまざまな記録に必ずしも反映していない。ホームページをみても、それらの行事の痕跡を見いだすことはできない。となると、それらの講演会や懇話会に参加した人々しか、それらの行事に接することができないことになる。これでは、知の公共性の視点からいってあまりにも閉鎖的であると言え

よう。

これらの記録の積み重ねによって、研究所の活動は広く世界に対して問われるのであり、人々から評価されるのである。

さらに、南山大学人類学研究所叢書Ⅰ～Ⅷを発刊したり *Asian Folklore Studies* を長年にわたって刊行したりしていることも評価に値する。しかしながら、同時に、人類学研究所の最大の弱点は出版力の欠如である。

モノグラフの出版は、南山大学選書として一九六〇年代と七〇年代にかけて四冊、さらに、紀要に関しては、一九七〇年代に八冊出されたのみである。

研究活動報告書（＝南山大学人類学研究所叢書）は、五冊が自費出版であり、直近のわずか二冊だけが市販されているにすぎない。（叢書Ⅰ～Ⅴも近年、風響社から出された本に広告が掲載されていることは積極的に評価できる）。

このようにみていくとき、古いバックナンバーや自費出版の報告書がホームページ上で市販されているとはいうものの、実際の市販本は、わずか二冊にすぎないのである。となれば、人類学研究所の活動は、学内的にも学外に対してもアピールするものとはなっていないだろう。

また、今となつては *Asian Folklore Studies* の価値が人類学研究所のスタッフにも認められるようになったが、それが研究所の事業として予算的にも認知されるようになったのは、ハイジック総合委員会委員長が人類学研究所長を兼務したときがはじめてである。つまり、一九九五年になるまでは、AFSは、エーダー神父個人の事業であり、彼の死後はクネヒト元所長個人の事業であったのである。エーダー神父が三八年間、クネヒト元所長が二六年間にわたって、その責を果たしてきた功績は、高く評価しなければならない。

人類学研究所の存続が危うくなったため、二〇〇六年の終わりになって AFS の編集責任は南山宗文化研究所に移管されたが、それは、執行部が人類学研究所の存続よりも AFS の存続の方を優先したためであると考えられる。したがって、AFS の移管は、人類学研究所の存続がどれほど危機に瀕しているかということの表れであると言える。

おわりに

このように、南山大学の歴史の中でも対外的にきわめて有名な人類学研究所の歴史は、決して平坦なものではなかった。そして、二〇〇七年現在、大きな危機を迎えていることはだれの目にも明らかである。

人類学研究所は、今こそ第二の改組の時期を迎えているのであり、私は、本論がその一助となることを願ってやまない。

注

(1) 私は、二〇〇七年五月八日の評議会の承認を経て、正式に人類学研究所長に任命された。本論は、私が研究所総合委員会に二〇〇七年五月一七日に提出した「人類学研究所の活動の見直しと将来構想の策定に向けて」および添付資料「南山大学人類学研究所の歴史」と「人類学研究所の出版物と研究活動の詳細」に基づいている。その後、さらにさまざまな資料に当たり直して大幅な改訂を行った。

(2) 同研究所の歴史を振り返るに当たって、まず『南山大学

五十年史』の「人類学研究所」(クネヒト著)を骨組みとして使い、次に『南山大学広報』、『南山学園報』、さらに、『アカデミア』、南山学園創立七五周年記念誌編纂委員会『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園創立七五周年記念誌』(二〇〇七年)などを用いるとともに、史料室の手書き資料などを参照した。

(3) Wilhelm Schmidt, *Der Ursprung der Gottesidee: eine historisch-kritische und positive Studie* (Munster in Westfalen:

Aschendorf, 1929-55).

- (4) *Anthropos: revue internationale d'ethnologie et de linguistique*, Anthropos Institut. (Wien: St. Gabriel-Mödling, 1966-)
- (5) アントローポス研究所のホームページ参照。
<http://www.anthropos-journal.de/>
- (6) 中山英司「南山大学付属人類学民族学研究所の創設」『民族学研究』第一四卷二号、一九四九年、一六六頁。
- (7) このあたりの事情に関しては以下を参照した。南山学園創立七十五周年記念誌編纂委員会『HOMINIS DIGINITATI 1932-2007 南山学園創立七十五周年記念誌』二〇〇七年、一二一—一二三頁。
- (8) 輔仁大学ホームページ参照。同ホームページでは、中国司教団ではなく、中国主教団となっているが、日本語の場合、主教 (episcopos: bishop) は正教会や聖公会の用語であるので、ここではカトリック教会の用語としてあえて司教を用いたことをお断りしておきたい。
<http://www.fju.edu.tw/jpu/about.htm> (二〇〇八年一月二日アクセス)。
- (9) 中山英司は、第二次大戦中、日本人による南方進出の基礎調査を行った人物であった。同著『日本人の熱帯適応性』太平洋協会編、六興商会出版部、一九四三年。中山が医学博士であったことは、中山英司「南山大学付属人類学民族学研究所の創設」からも確認できる。初期の大学生の夏休みの課題については以下による。伊藤秋男「南山の考古学研究と私の半生」伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会編『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』、二〇〇七年八月、三頁。
- (10) 「南山大学人類学研究所紀要発刊の辞」『人類学研究所紀要』第一号 (創刊号)、一九七二年、参照。

(11) 同書、一二八頁。

- (12) 当初、所長と所長事務取扱の区別は明確ではなかったが、一九七〇年代の改組の時期までには、研究所専任の研究所責任者が所長と呼ばれ、学部専任教員が研究所責任者を兼務する場合を所長事務取扱と呼ぶようになった。しかしながら、二〇〇〇年の全学的な改組の時期にはこの区別がなくなり、後者をも便宜上、所長と呼ぶようになった。
- (13) 『五十年史』によれば、人類学教員との不協和音が一九五二年の学科設立当初からあったということになっているが、実際には人類学教員と研究所員の区別がないので、その可能性は考えられない。私も当初、この説に依拠していたが、他の資料に基づいてその記述を改めることにした。一九五九年九月の増設申請書では、フランツ・ギート、小林知生、浅井恵倫、アントン・レンメルヒルト、マルティン・グシンド、沼澤喜市、吉田章一郎、山田隆治、西脇博の名が挙げられている。ここでわかることは、当初、人類学教員六名中五名が神言会士であったが、増設後は、九名中四名にまで神言会士の比率が下がっていることである。
- (14) 文化人類学会HPの資料に基づく。
- (15) また、以下のように、その間、予算停止期間があったといわれているが、大学の公文書では必ずしも確認できない。クネヒト「人類学研究所」『南山大学五十年史』(南山大学、四一五ページ)では人類学研究所改組準備委員会の設置が一九七三年春となっているが、『南山大学広報』によれば一九七四年四月一日となっている。クネヒトは同じく人類学研究所の予算停止に言及しているが、伊藤秋男によれば、それは一九七八年のことである。伊藤秋男、前掲論文、一一頁。
- (16) 人類学の大学院生はオブザーバーとして参加することが

できた。

(17) 『アカデミア』人文・社会科学編六七号へ倉田勇教授・山田隆治教授退職記念号(南山大学、一九九八年三月)の記述では、山田教授は、一九七九年から人類学研究所所長事務取扱を併任となっている。そのため、当初、前任者の小林知生教授の任期を調べたり、さまざまな資料を基に調べたりしたときには一九七八・七九年は所長が不在でなかったかと思われた。しかしながら、改めて『南山大学広報』を調べたところ、山田教授が事務取扱をしていたことがわかり、空白期間がないことがわかった。

(18) 白鳥芳郎教授と人類学研究所の縁により「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」が一九六七年に収集した資料が上智大学から人類学博物館にもたらされた。重松和男「上智大学からの移管の経緯と史料内容」『人類学博物館紀要』一二五号、二〇〇四年、参照。

(19) 第七期に関しては、『人類学研究所通信』に一部記載漏れがあり、大学の業績一覧によって補った。

(20) 研究会の構成や回数に関しては、自費出版されていた第一期から第五期までは叢書そのものにくわしい記述が見出される。叢書が一般書として市販されるようになった第六期以降に関しては、叢書そのものにこれらの記述はほとんどまったく見出されない。そこで、『人類学研究所通信』によってその内容を補完せざるをえなかった。

(21) 「第五期研究計画」『人類学研究所通信』第一号、四ページ、

ジ、参照。事実上、この間、杉本第一種研究所員が学位論文を執筆して多忙であったということが影響しているのかもしれない。また、第五期に関しては、研究担当者のうち一二名中一〇名が外部の研究者であったため、予算的な制約もあつたと考えられる。

(22) ただし、第八期に関して、二〇〇五年には「第八期長期研究プロジェクト予備研究会」として二回の研究会が開催され、五件の発表がなされているのが指摘できる。

(23) 宮沢所員に説明を求めたところ、当時のクネヒト所長からは研究プロジェクトには予算が付いていないと言われたため、外部資金を求めたことであつた。むしろ、研究プロジェクトの費用は、外部の研究者の場合、謝金と交通費、滞在費といった名目で支払われるわけで、特別に研究プロジェクト費として計上されているわけではない。これらの資金の用途は、東海学術振興財団の資金は各研究担当者の個人研究費に充てられ、経営研究センターの資金は関連図書を購入費に充てられたとの報告を受けている。

(24) 二〇〇五年四月一六日付「二〇〇四年度予算執行率六〇%未満理由書」による。

(25) 第八期に関しては、私は、研究所員からすでに事実上すべて研究会を終えたとの説明を受けているので、二〇〇五年度の準備研究会と二〇〇六年度の研究会の発表原稿一〇点を中心に出版の準備が行われていると考えられる。

(26) <http://webat.nii.ac.jp/> 二〇〇八年二月六日アクセス。

- をめぐる学際的まなざし』
 (叢書Ⅶ、風響社、2005)
- 2006～2008 第8期研究活動「コロニアル、ポスト・コロニアル期における社会変動と宗教の「再選択」」
- 坂井 信三 南山大学人文学部人類文化学科教授
 森部 一 南山大学人文学部人類文化学科教授
 川田 牧人 中京大学社会学部教授
 吉田 竹也 南山大学人文学部人類文化学科准教授
 加藤 隆浩 南山大学外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科教授
 石原美奈子 南山大学人文学部人類文化学科准教授
 中田 友子 南山大学人類学研究所非常勤研究員
 河邊 真次 南山大学大学院文学研究科博士後期課程
 宮沢 千尋 南山大学人類学研究所准教授
- 2006 講演会シリーズ「障害と障害者の文化人類学」4回
- 2006 3.20. 『人類学研究所通信』第13・14号、23pp.
 3.31. クネヒトが定年退職。
 秋 *Asian Folklore Studies* の編集責任が南山宗教文化研究所に移転。
- 2007 3.20. 『人類学研究所通信』第15号、16pp.

人類学研究所存廃の危機

- 2007 4.1. 人事問題が解決されず、時間切れで所長ポストが空席になる。このままでは、今年度いっぱい人類学研究所が閉鎖されるかもしれないという危機的な状態が生じる。
- 4.23. 将来構想委員会で渡邊学南山宗教文化研究所第一種研究所員が所長に適任との判断が下る。
- 5.8. 評議会で渡邊学の人類学研究所長(2007.4.1.～2009.3.31.) 就任が確定する。
- 講演会シリーズ「紛争と災害の文化人類学」4回
- 2008 1.29. 評議会で人類学研究所の改組が決まる。

- 宮原 暁 大阪外大 助教授
 芹澤知広 奈良大学 専任講師
 村上忠良 日本学術振興会 特別研究員
 谷口裕久 京都文教大学 助手
- 1997～1998 Karen Smyers が客員研究員。
 1998 3月 『人類学研究所通信』第5・6号、15pp.
 1998 3.31. 山田隆治、倉田勇が定年退職。
 吉原和男第一種研究員が退職し、慶應義塾大学に転出。
 1998 4.1. 宮沢千尋（東京大学大学院生）が研究生（～1999.3.31.）として採用される。
 講演会シリーズ「開発と原住民文化」4回
 1999 3月 『人類学研究所通信』第7号、11pp.
 1999 4.1. 宮沢千尋が第一種研究員（～現在に至る）。
 2000 3月 『人類学研究所通信』第8号、14pp.
 2000 4.1. 南山大学の改組により、文学部人類学科は、人文学部人類文化学科という学際的な学科になる。
 講演会シリーズ「日本のもう一つの顔—知られざる神秘—」4回
 2001 3月 『人類学研究所通信』第9号、22pp.
 2001 3.20. 吉原和男、クネヒト編『アジア移民のエスニシティと宗教』（叢書VI、風響社、2001）
 2001 講演会シリーズ「イスラームの世界を知りたい」4回
 2001～2004 第7期研究活動「アジア市場の文化と社会
 ——流通・交換をめぐる学際的まなざし」
 宮沢千尋 南山大学 助教授
 中西久枝 名古屋大大学院 教授
 原不二夫 南山大学 教授
 森部 一 南山大学 教授
 吉田竹也 南山大学 助教授
 中 裕史 南山大学 助教授
 クネヒト 南山大学 教授
 坂井信三 南山大学 教授
- 2002 3.20. 『人類学研究所通信』第10号、27pp.
 2002 6.～ 講演会シリーズ「テロや紛争などの暴力行為はなぜおこるか」4回
 2003 3.20. 『人類学研究所通信』第11号、24pp.
 2003 4.1. 森部一第二種研究員（人文学部教授）が所長に就任（～2005.3.31.）
 所長（第一種研究員）候補者選任の模索。研究所総合委員会のもとでワーキンググループを作る。
 WGのメンバー：森部一所長、奥山倫明宗文研第一種研究員、奥田太郎社倫研第一種研究員の3名
 早川正一、森部一、小谷凱宣、中 裕史 第二種研究員（～2005.3.31.）
- 2004 3.20. 『人類学研究所通信』第12号、30pp.
 2004 4.1. 坂井信三第二種研究員（～現在）
 2005 4.1. 坂井信三第二種研究員（人文学部教授）が所長に就任（～2007.3.31.）
 所長候補者選任の模索が続いたが、第一種研究員が所長を含めて1名とわかり、現第一種研究員の処遇が問題になる。
 森部一、加藤隆浩、中裕史 第二種研究員（～2007.3.31.）
- 2005 宮沢千尋編『アジア市場（マーケット）の文化と社会——流通・交換

- 出口 顕 島根大学 助教授
 中島星子 南山大学 非常勤講師
 小林 勝 総合研究大学院大学
 杉本良男 南山大学 助教授
- 1992 5月 『人類学研究所通信』第1号（創刊号）、24pp.
 5月 日本民族学会第27回研究大会を南山大学で開催。
- 1993 4.1. ハンス ユーゲン・マルクスが第5代学長に就任。
 クネヒト第二種研究所員（～95.3.31.）
 坂井信三第二種研究所員（～95.3.31.）
- 1993 5月 『人類学研究所通信』第2号、43pp.
- 1995 3.25. 杉本良男編『宗教・民族・伝統——イデオロギー論的考察』（叢書V、1995）
 Sugimoto Yoshio, ed., *Traditional Religion, Nation, and Tradition*, Nanzan Studies in Cultural Anthropology V, English résumés translated by Thomas L. Kirchner, Nanzan Anthropological Institute, 1995, pp. 307-349.
- 1995 3.31. 杉本良男第一種研究所員が退職し、民族学博物館に転出。

改組世代の定年と第一種の転任

- 改組に寄与した山田隆治、倉田勇両教授が1995年に定年を迎え任期延長期間に入ったため、所長事務取扱を含め、役職につけなくなった。後継者が養成されていなかったため、山田隆治所長事務取扱の後任人事が難航し、ハイジック総合委員会委員長が兼務することで一次的にしのぎ、新たな所長を選任することになった。
- 1995 4.1. ハイジック総合委員会委員長・南山宗教文化研究所長が人類学研究所長を兼務（～96.3.31.）
 クネヒト第二種研究所員（～96.3.31.）
 坂井信三第二種研究所員（～97.3.31.）
- 1995 5月 『人類学研究所通信』第3・4号、16pp.
- 1995 10.12. 所員会議（95-06）においてAsian Folklore Studiesが人類学研究所の雑誌であることを再確認し、人類研の予算枠に一般経費と雑誌経費に分けて計上することを確認した。
- 1996 4.1. クネヒトが第一種研究所員（～2004.3.31.）となり、所長に就任（～2003.3.31.）
 講演会シリーズ「日本人の女性人類学者」4回
 吉原和男が第一種研究所員（～98.3.31.）
- 1997 4.1. 早川正一第二種研究所員（～99.3.31.）
 講演会シリーズ「ジェンダーについて」4回
- 1997～2000 第6期研究活動「アジア移民のエスニシティと宗教」
 吉原和男 南山大学 助教授
 川上郁夫 宮城教育大学 教授
 田沼幸子 大阪大学大学院
 王 維 中部大学・中部高等学術研究所研究員。
 韓 景旭 西南学院大学 助教授
 藤井健志 東京学芸大学 教授
 五十嵐真子 神戸学院大学 助教授
 三尾裕子 東京外大AA研 助教授
 床呂郁哉 東京外大AA研 助教授

- 1988 白鳥芳郎・杉本良男編『伝統宗教と社会・政治的統合』（叢書Ⅲ、1988）
Shiratori Yoshiro and Sugimoto Yoshio, eds., *Traditional Religion and Socio-Political Integration*, Nanzan Studies in Cultural Anthropology III, English résumés translated by Paul L. Swanson, Nanzan Anthropological Institute, 1988, pp. 297-349.
- 『学術雑誌目録』南山大学人類学研究所（1988）
- 1988～1991 第4期研究活動「伝統宗教と伝統的知識体系」
- | | | | |
|-------|---------|------|--------------------|
| 白鳥芳郎 | 上智大学文学部 | 名誉教授 | 中国南部（道教） |
| 佐々木宏幹 | 駒沢大学 | 教授 | 日本、台湾、東南アジア（仏教・道教） |
| 大岩 碩 | 金城大学文学部 | 助教授 | スリランカ（仏教） |
| 三浦太郎 | 英知大学 | 助教授 | フィリピン（イスラーム） |
| 加藤隆浩 | 関西外国語大学 | 講師 | ペルー（キリスト教） |
| 山田隆治 | 南山大学文学部 | 教授 | インド（ヒンドゥー教） |
| 倉田 勇 | 同上 | 教授 | インドネシア（イスラーム） |
| 森部 一 | 同上 | 助教授 | タイ（仏教） |
| クネヒト | 同上 | 助教授 | 日本（仏教） |
| 坂井信三 | 同上 | 助教授 | 西アフリカ（イスラーム） |
| 杉本良男 | 同上 | 助教授 | 南アジア（仏教、ヒンドゥー教） |
- 1991 4.1. 山田隆治が所長事務取扱に就任。（～95.3.31.）
- 1991 杉本良男編『伝統宗教と知識』（叢書Ⅳ、1991）
Sugimoto Yoshio, ed., *Traditional Religion and Knowledge*, Nanzan Studies in Cultural Anthropology IV, English résumés translated by Edmund R. Skrypczak, Nanzan Anthropological Institute, 1991, pp. 375-445.
- 『学術雑誌目録』南山大学人類学研究所（1991）
- 1992～1995 第5期研究活動「宗教・民族・伝統のイデオロギー論的考察」
- | | | | |
|-------|---------|-----|---------------|
| 佐々木宏幹 | 駒沢大学 | 教授 | 東南アジア華人社会 |
| 吉原 和男 | 近畿大学 | 助教授 | 東南アジア華人社会 |
| 山下 晋司 | 東京大学 | 助教授 | インドネシア |
| 長谷川清 | 岐阜教育大学 | 講師 | 中国南部 |
| 馬場 雄司 | 同朋大学 | 講師 | タイ北部 |
| 小野澤正喜 | 筑波大学 | 助教授 | タイ |
| 石井 溥 | 東京外大AA研 | 教授 | ネパール、東インド |
| 関根康正 | 学習院女子短大 | 教授 | 南インド・タミルナードゥ州 |
| 小林 勝 | 長崎純心大学 | 講師 | 南インド・ケララ州 |
| 大塚和夫 | 東京都立大学 | 助教授 | 中近東、北アフリカ |
| 坂井信三 | 南山大学文学部 | 助教授 | 西アフリカ |
| 杉本良男 | 同上 | 助教授 | スリランカ、南アジア |
- 1992～1995 研究会「キリスト教ミッションの人類学的研究の試み」
- | | | |
|------|--------------|-----|
| クネヒト | 南山大学文学部 | 助教授 |
| 笠原政治 | 横浜国立大学 | 助教授 |
| 玉置康明 | 静岡県立大学 | 助教授 |
| 吉岡政徳 | 神戸大学 | 助教授 |
| 川崎一平 | 岡崎学園大学国際短期大学 | 講師 |
| 原 毅彦 | 信州大学 | 助教授 |
| 加藤隆浩 | 関西外国語大学 | 講師 |

- | | | | | |
|--|------|---------|----|------------------|
| | 山田隆治 | 南山大学文学部 | 教授 | インド (ヒンドゥー教) |
| | 倉田 勇 | 同上 | 教授 | インドネシア (イスラーム) |
| | 森部 一 | 同上 | 講師 | タイ (仏教) |
| | 杉本良男 | 同上 | 講師 | 南アジア (ヒンドゥー教、仏教) |
- 1979 10.17. 南山大学人類学資料陳列室は南山大学博物館と名称変更。
- 1980 2.18. 沼澤喜市元所長 (元学長) が死去。
- 4.26. エーダー人類学研究所客員研究所員、元本学教授死去。
1968年、文学部人類学科教授 (民族学担当)、1974年定年退職していったん帰欧。1976年9月から1979年3月まで南山宗教文化研究所所員。1979年4月から人類学研究所客員研究所員。
- 5.26. ベトロ・クネヒト第二種研究所員 (~83.3.31.)
- 1981 4.1. 倉田勇が第一種研究所員併任 (~84.3.31.)
- 6.24. 私学振興財団から共同研究「土着宗教と伝統宗教」に対して250万円の研究費交付。
- 1982 3.20. 白鳥芳郎・山田隆治編『伝統宗教と民間信仰』(叢書Ⅰ、1982)
- 1982~1985 第2期研究活動「伝統宗教と土着化の諸相」
- | | | | | |
|--|-------|---------|-----|---------------------|
| | 白鳥芳郎 | 上智大学文学部 | 教授 | 中国東南沿岸地方 (道教) |
| | 佐々木宏幹 | 駒沢大学 | 教授 | 日本、台湾、マレーシア (仏教) |
| | 大岩 碩 | 金城大学文学部 | 助教授 | スリランカ (仏教) |
| | 山田隆治 | 南山大学文学部 | 教授 | インド (ヒンドゥー教) |
| | 倉田 勇 | 同上 | 教授 | インドネシア (イスラーム) |
| | 森部 一 | 同上 | 助教授 | タイ (仏教) |
| | 坂井信三 | 同上 | 講師 | 西アフリカ (イスラーム) |
| | 杉本良男 | 同上 | 講師 | 南アジア (ヒンドゥー教、イスラーム) |
- 1983 6.16. ヒルシュマイヤー学長没。
- 1983 9.21. ロバート・リーマー第4代学長就任。
- 1984 4.1. 杉本良男が第一種研究所員 (~95.3.31.)
- 1985 4.1. 倉田勇が第二種研究所員併任 (~91.3.31.)
- 1985 3.20. 白鳥芳郎・倉田勇編『宗教的統合の諸相』(叢書Ⅱ、1985)
- 1985~1988 第3期研究活動「伝統宗教と社会・政治的統合」
- | | | | | |
|--|-------|---------|-----|---------------------|
| | 白鳥芳郎 | 上智大学文学部 | 教授 | 中国東南沿岸地方 (道教) |
| | 佐々木宏幹 | 駒沢大学 | 教授 | 日本、台湾、東南アジア (仏教・道教) |
| | 大岩 碩 | 金城大学文学部 | 助教授 | スリランカ (仏教) |
| | 三浦太郎 | 英知大学 | 講師 | フィリピン (イスラーム) |
| | 山田隆治 | 南山大学文学部 | 教授 | インド (ヒンドゥー教) |
| | 倉田 勇 | 同上 | 教授 | インドネシア (イスラーム) |
| | 森部 一 | 同上 | 助教授 | タイ (仏教) |
| | クネヒト | 同上 | 助教授 | 日本 (仏教) |
| | 坂井信三 | 同上 | 助教授 | 西アフリカ (イスラーム) |
| | 杉本良男 | 同上 | 助教授 | 南アジア (仏教、ヒンドゥー教) |
- 1986 4.1. 山田隆治が第二種研究所員併任 (~94.3.31.)
- 1987 4.1. 倉田勇が所長事務取扱に就任。 (~91.3.31.)

- 人類学研究所運営委員：早川正一、牛島巖
- 1975 4.1. 小林知生（考古学者）が所長事務取扱に就任（～78.3.31）。
人類学研究所運営委員：伊藤秋男（紀要担当）、早川正一（図書・陳列室担当）（～77.3.31.）
- 4.10. 『人類学研究所紀要』4号（南山大学人類学研究所発行）(1975.4.10.)
- 1976 4.20. 『人類学研究所紀要』5号（南山大学人類学研究所発行）(1976.4.20.)
- 1977 12.30. 『人類学研究所紀要』6号（南山大学人類学研究所発行）(1977.12.30.)
『白山藪古墳発掘調査報告』
- 1978 3.30. 『人類学研究所紀要』7号（南山大学人類学研究所発行）(1978.3.30.)
- 3.31. 小林知生所長事務取扱が定年退職。
- 1978 4.1. 山田隆治が所長事務取扱（～79.3.31）
- 3.30. 『人類学研究所紀要』7号（南山大学人類学研究所発行）(1978.3.30.)
- 11.30. 『人類学研究所紀要』8号（南山大学人類学研究所発行）(1978.11.30.)
- 12.19. 宗教文化研究所・人類学研究所改組準備委員会
委員長：伊藤孝一（総務担当学長補佐）、委員：宮内璋（旧人類学研究所改組研究委員会委員）、卜部小十郎（同委員）、山田隆治（同委員および宗教文化研究所理事）、ヤン・ヴァンプラフト（宗教文化研究所長）、長坂源一郎（宗教文化研究所理事）、山本勇郎（事務部長）

改組：学長直属から大学付置へ——宗教民族学の重点化——

- 研究所に兼任研究所員（第二種）だけでなく専任研究所員（第一種）を配置することが決定される。これはある意味で修道会士の専従研究者に代わるものである。
- 1979 4.1. 山田隆治が所長事務取扱（～87.3.31; 91.4.1.～95.3.31.）および第二種研究所員（兼）に就任（～82.3.31; 86.4.1.～94.3.31.）。
白鳥芳郎（上智大学教授）が客員研究所員
人類学研究所運営委員：伊藤秋男、早川正一
人類学研究所陳列室を南山大学人類学資料陳列室と改称。管理運営は文学部人類学科に委嘱。
南山大学人類学研究所規程、南山大学研究所総合委員会規程が施行される。

規程

「第2条 [人類学] 研究所は次の各号の目的を有する。

- 1 主としてアジア諸地域の基層的、伝統的な民族文化を研究対象とし、宗教民族学その他の諸問題ないしは、一定地域社会に関する比較的短期間の歴史人類学的な特定研究の実施。
- 2 特定研究の積み重ねによる、これら諸地域における民族文化の特性およびその形成、相互交渉の様相ならびにその展開過程等の解明」。

「南山大学人類学研究所および南山宗教文化研究所の組織・運営に関する了解事項」

研究所総合委員会の設置 委員長：ヴァンプラフト 委員：山田隆治、ヤン・スインゲドウ、ジェームズ・ハイジック、白鳥芳郎（人類学研究所客員研究所員）、卜部小十郎（文学部）、宮内璋（文学部）、長坂源一郎（外国語学部）（～1981.3.31.）

- 1979～1982 第1期研究活動「土着宗教と伝統宗教」

白鳥芳郎	上智大学文学部 教授	中国南西部(道教)
大岩 碩	金城大学文学部 講師	スリランカ(仏教)

人類学民族学研究所の最盛期

- 1952 4.1. 社会科学部人類学科設立。人類学研究所員が人類学科教員となる。
- 1953 夏 教師館であった五軒家町の旧ピオ11世館に移転。
- 1954 レンメルヒルト(言語学者)が第2代所長に就任。「人類学民族学研究所」と「人類学研究所」の両方の名称が使われて混乱していたが「人類学研究所」に統一。
- 1955 10.15-17. 南山大学他において第10回日本人類学会日本民族学協会連合大会が開催される。レンメルヒルト所長が大会会長、中山副所長が総務を担当。大会では、前年スイスで世界したシュミットの記念研究会が催され、沼澤と中山をはじめとして、南山大学の人類学者数名が研究発表を行った。
- 1957 4.1. 沼澤喜市(副学長)が第2代学長に就任。
- 1960 マルティン・グシンデ著『アフリカの矮小民族——ピグミーの生活と文化』(南山大学選書1)、築島謙三訳、平凡社、1960年[グシンデは、アントローポス研究所創立者の一人。]
- 1962 シュミット著『母権』(南山大学選書2)、山田隆治訳、中日新聞社、1962年
Martin Gusinde and Chiye Sano, eds. *An annotated bibliography of Ainu studies by Japanese scholars*, Collectanea universitatis catholicae Nanzan Series 3, Tokyo:Heibonsha, Nagoya: Nanzan University, 1962.
- 1964 南山大学が山里町の新校舎に移転したのに伴い、同研究所も人類学科とともに第1研究棟6階に移転し、陳列室は新図書館地下1階に収まった。
- 1967 11.11-12. 陳列室が文部省から博物館相当施設に指定された。
南山大学において第22回日本人類学会・日本民族学会連合大会が開催される。レンメルヒルトが大会会長。
- 1969 11-12. 世界民族美術展(愛知県美術館):主催中日新聞他、後援:外務省他、協賛:南山大学、アントローポス研究所
- 1970 10.1. 沼澤学長が研究所長事務取扱を兼務した。
- 1971 南山大学人類学研究所編『W・シュミット生誕100年記念論文集』(南山大学選書4)、中日新聞社、1971年
- 1972 4.1. 沼澤教授が学長退任後、所長事務取扱に就任(～73.3.31)。『人類学研究所紀要』1号(1972.日付なし)を発刊。
ヨハネス・ヒルシュマイヤー(経営学者)が第3代学長に就任。

人類学研究所の改組とその経緯

- 人類学研究所が神言会の手を離れ人類学科の一般教員を中心に運営される方向性が模索される。
- 1973 『人類学研究所紀要』2号(南山大学文学部人類学研究所発行)
(1973.7.1.)
- 1974 レンメルヒルトが所長に就任(～75.3.31)。
『人類学研究所紀要』3号(南山大学文学部人類学研究所発行)
(1974.5.15.)
- 1974 4.1. 人類学研究所改組研究委員会設置
委員長:伊藤孝一 委員:小林知生、レンメルヒルト、卜部小十郎、宮内璋、山田隆治

南山大学人類学研究所の歴史

前史：構想

- 1935 ヴィルヘルム・シュミットが来日時に1931年設立のアントローボス研究所日本支部設立案を神言会総会に提出。
*同研究所の最初の規則は、「諸民族と文化の歴史の中における神の神秘的な働きと人間精神のたゆまぬ探求の発見や記述をわかちあう」ことを促しており、信仰上の動機づけがみられる。
- 1947 シュミット案が神言会の活動目的再検討によって棚上げされる。

南山大学創立

- 1948 南山大学設置申請書に人類学民族学研究所の設置が盛り込まれる。南山大学創立。アロイジオ・パッヘが初代学長に就任。
- 1949 4.1.

人類学民族学研究所の設立

- 1949 9.1. 人類学民族学研究所が学長直属機関として開設される。文化人類学を志向するアントローボス研究所と異なり、形質（自然）人類学を「重要研究科目」としている（沼澤喜市「発刊の辞」『紀要』1号）。人類学者の神言会士の豊富な人的資源を基本前提として設立された。したがって、その規模を維持できるかどうかは、神言会が新たな人材を供給できるかどうかにかかっていたと考えられる。
- 初代所長 沼澤喜市 副所長 中山英司
- 正所員 民族学 沼澤喜市、マテオ・エーダー、オーベルレ、ファイフェル、浅井恵倫
言語学 フランシス・ギート、アントン・レンメルヒルト
人類学 中山英司、清野謙次
比較宗教学 ゲマインダ、田北耕也
- 客員 ブーシュ（支那学）、シュライバー（支那学）、ラーマン（民族学）、グロート（考古学）、エーダー（民俗学）、ナーベルフェルト（考古学）
- 賛助員 岡正雄、石田英一郎、水野清一
- 顧問 シュミット、デル・レ、長谷部言人、原田淑人、渋沢敬三、梅原末治
- （中山英司「南山大学付属人類学民族学研究所の創設」『民族学研究』第14巻2号、1949年、p.166）。
- 1951 8.1. 初代所長 沼澤喜市（民族学者） 副所長 中山英司（形質人類学者）
民族学部 沼澤喜市、エーダー
言語学部 浅井恵倫、ギート、レンメルヒルト
人類学・考古学部 中山英司、清野謙次
助手、写真技手、図工、タイピスト、調査補助員、庶務会計事務員
賛助員 岡正雄、石田英一郎、水野清一、駒井和愛、金関丈夫
顧問 シュミット、デル・レ、長谷部言人、原田淑人、渋沢敬三、梅原末治、松本信廣、金田一京助、柳田國男
（1953年頃の手書き資料による）
図書数：3500冊、その他、北京輔仁大学所蔵人類学関係図書約8000冊

The History and Evaluation of Nanzan Anthropological Institute

WATANABE Manabu

Abstract

This paper explores the history and performs an evaluation of the Nanzan Anthropological Institute. It shows that its plan predated even the foundation of Nanzan University itself. The world-famous anthropologist Wilhelm Schmidt was a member of Divine Word Missionaries and the founder of Anthropos Institute in Europe. In 1935 he urged the members of the society to build a branch institute in Japan.

The Nanzan Anthropological Institute was called the Nanzan Institute for Anthropology and Ethnology when it was founded in September 1949, a half year later than the foundation of Nanzan University, and it was renamed as the Nanzan Anthropological Institute in 1954. It was a comprehensive institute including natural anthropology, cultural anthropology (ethnology), archeology, and linguistics.

The Institute was reformed in 1979 into the institute of cultural anthropology, especially that of Asia. It has a long history of pursuing several three-year research projects. In the last ten years, however, it has reached an impasse.

The author concludes that the Nanzan Anthropological Institute should be radically reformed again in the near future.